
世界の関係者たち

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の関係者たち

【Zコード】

Z8927C

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

ミッシング・リンク番外編。ミッシング・リンクの前にあつた『世界の関係者』たちの出会い。『世界の関係者』とは?ミッシング・リンクの世界がわかります。

1・必然の出会い

鈴の音のような声があることを初めて知った。凜と響くそれは心地よく。

「世界を守つてください」「頭が痛くなつた。

「えつと、間に合つてます?」

「怪しい宗教の勧誘じゃありません。そうですね…じゃあ、『思い出してください』」

言い直されても困つた。意味がわからないことは変わらない。前髪を眉の上で切りそろえた、肩までの長い髪を持つ見たことがないくらいの可愛い女性は、穏やかな笑みを崩さなかつた。

「世界を守るつて、滅亡でもするわけ?」

「それには関係ありません。それは違う人の役目です」「じゃあどうしろつて言つんだよ…」

世界を守れと言つておいて、滅亡から守るのは他の人の役目だなんて。じゃあ、何を守ればいいんだ。

俺の苛立ちを感じ取つたのか、女性は微かに口元を苦笑に変えた。「思い出せば、全て理解できますよ。守るべきもの、制御するもの。次の新月がタイムリミットです」

にっこりと笑い、女性はふつと消えた。跡形もなく、何もなかつたかのように。

近所の公園に、誰もいない深夜。空を見上げると、少し欠けた月が青白く光つていた。

なんだかよくわからない、と目を閉じて頭を整理した。『世界を守れ』と言つた女性は突然消えた。そもそも、いつから彼女はいたのか。そして、俺はいつから公園にいたのか。ゆっくりと目を開けると、そこには見慣れた天井があつた。夢か。現実だと思っていた

やりとり。それが夢だとわかつて安心半分不安半分だった。自然と生まれる疑問。いつ寝たのか。あの女性は誰なのか。

胸にもやもやを抱いたまま、勢いよく起き上がった。

異様に伸びるのが速い前髪のせいで、髪型はいつもおかっぱのようになる。さすがに目にかかる分は自分で適度な長さで切るが、耳にかかる分から後ろは放置している。

そんな髪型でも似合うくらい、顔は整っていると自負している。少し癖の付いたサイドの髪を指先でいじりながら学校へ向かっていた。

「おはよう」

後ろから軽く肩を叩いたのは、短期留学してきたクラスメイトだった。留学といつても生糸の日本人で、名前も漢字で紗雲泉さくもいすみだった。アメリカに留学し、学校のプログラムの一環として一ヶ月の短期留学として日本に戻ってきた、と説明されたのを覚えている。

「…おはよう」

「悪い夢でも見た？ 美人さんが台無しだよー？」

口調はふざけていたが、指摘は鋭かつた。一目見ただけで寝不足を見抜くとは。前から、紗雲はどこか普通とは違っている気がした。『紗雲泉』を演じてているような、そんな感触を受けることがある。今、まさにそんな感じで。

とにかく話してみよっと思った。

「夢に可愛い人が出てきた」

「それって悪夢？」

「『世界を守れ』って言われたからな」

呆れたように笑うと、紗雲は一瞬変な顔になつた。それは上手く隠され、いつもと同じ笑みに戻つたが、それが不自然に見えた。あの一瞬浮かべた顔はまるで。

懐かしい人に会つたときに浮かべるような、喜びを抑えたような。

一瞬、仮面が外れたような感じがした。

「救世主になれってこと？」

「違うらしい。意味が分からなくて悩んだ結果がコレ」

コレ、と顔を人差し指で示した。それに納得したかのように、紗雲は深く頷いた。結局は夢の中での話。単なる夢だと割り切ろうとしたのに。

「夢は深層心理の表れっていうよね。『正夢』という予知もある。その夢はどっちかかもしれないね」

紗雲は楽しそうに、あははと笑つた。笑い事じゃないって。どっちでも困る。余計に意味が分からなくなるだけだ。

まだ話す気があるのか、紗雲は横に並んで歩き続けた。

「そういえば、紗雲はクラスメイト全員を覚えているのか？」

留学してきたのは三日前。クラスメイトは四十人。まだ、特定の友人がいるようには見えない。それでも、俺に声をかけてきた。

「全員はまだだけど、『一色鮮香』くんは覚えたよ」

につこりと満面の笑みを向けた紗雲を見て、ため息を吐いた。なるほど。変わった名前だから印象に残つたのか。

「じゃあ、櫻や灰里も覚えた？」

「残念ながら、まだ。一応席が近い佐原さんや渡辺くんは覚えてるけどね」

クラスで変わっている名字、名前を挙げてみたが、反応はなかつた。

「『センカ』って名前の人を知つていたから。彼は鮮やかな花で鮮花だけど」

紗雲の表情が、驚くほど優しくなつた。センカ。同じ読みの名前の俺とは違う誰か。紗雲にとつて大切な人だということが、表情から伝わる。

「君の名前は誰がつけたの？」

「知らない人。俺が産まれる三日前に両親が神社にお参りに行つたとき、不思議な少年に会つたんだ。そいつが『その子の名前は鮮香。鮮やかに香るで鮮香だよ』って言つて。両親はなぜか納得したらし

く、迷うことなく決まつたつて。今でも、この名前以外考えられないつてや」

両親がその話をするとき、いつも楽しそうだつた。ずっと名前に悩んでいて、一応決まつていた名前。それがどうでもよくなるくらい、しつくりくる名前だつたと父は言つ。お腹の中にいる俺に『鮮香』と呼び続けた母。産まれたとき、それは確信に変わつた。そんな風に言われたら、知らない人がつけたことなんて関係ない。飽くまでも、決定したのは両親だ。

「素敵な名前だと思うよ。一つの色が鮮やかに番る。鮮香、つて呼んでもいい？」

からかうでもなく、慣れ慣れしくもなく、友人のそれで紗雲は言った。名前で呼ばれるのは久しぶりだつた。特別だと思うからこそ、気軽に呼ばせない。しかし、紗雲には名前で呼ばれてもいいような気がした。俺ではない『センカ』を知つている紗雲になら。

「じゃあ、俺は泉つて呼ぶな」

「どうぞ。君が友達第一号だね」

名前で呼ぶ仲は友達で合つていいだろ。変な夢の話をしたのも、泉になら話してもいいと思つたからで。最初から気になつていたのは否定できない。

このときから、必然的な運命の歯車は動きだした。いや、動いていた歯車が加速したのかもしれない。一つの要素によつて、それに気付くのは、まだ先のことだつた。

2・名前の価値

「いつの間に紗雲と仲良くなつたんだよー」

勢いよく後ろから抱きついた相模は、肩に顎を乗せた。新聞部に所属していることもあります。好奇心は旺盛な奴だ。厚かましくはない。人なつっこさは不快させるものではなく、一定の距離を保っていた。そんな相模は特定の友人を作らず、一番親しいのは俺だろう。

「一・色・くーん？」

「ああ、悪い。いつから仲良くなつたか、だつたな。今日の朝から」

「へ？ 前からの知り合いみたいに見えたけど」

「んー知つてるような気はしたけど、初対面。あれほどの美形を忘れるとは思えないし」

「それもそうだよね。美形コンビ誕生つてわけだ」

相模はニヤリと、面白いものでも見つけたかのように口元の端を上げた。

美形コンビ。今その片割れの泉はクラスの女子に囲まれ、質問責めにあつている。容姿端麗、成績優秀、そして帰国子女のバイリンガル。転校生にこれだけの付加価値があれば、仲良くしたいと思うのが普通だろう。俺は仲良くしようと言われた方だけ。

「相模は紗雲のところに行かないのか？」

「今行つても、有益な情報は得られないよ。どこに住んでいる、趣味は何。好きなものは、嫌いなものは。英語を話して、なんて、どうでもいいんだ。僕が訊きたいのは一つ」

「何故この学校に来たのか」

突然入つた第三者の声に、相模がビクッと震えたのが肩から伝わつた。いつの間に移動したのか、泉は相模の後ろに立つていた。さきまで女子と話していたのに。周りから不満の声がないから、上手く会話を終わらせてきたのだろう。

痛いほど視線を感じるが、まあ許容範囲だ。相模は肩から顎を退

け、代わりに手を置いた。不安なのかもしれない。正体の掴めない泉が。だから、いろんなものの真実を知るために新聞部に所属し、知らないから他人と深く関わらないのかもしれない。

相模は大きくため息を吐いた。

「ダブルビックリだ」

「ダブルビックリ？」

「あの女子達との会話を不満なく終わらせたのと、疑問を当てたこと」

距離感が掴めないのか、相模は机の向かい側に移動した。知らない物に興味津々の子供のように、しゃがんで机の上に腕と顎を置いた。

それに呆れた笑みを返してから泉に向き合った。

「で、なんでこの学校を留学先に選んだわけ？」

「あるに行けって言われたからだよ。ここでやるべき」とあるからつて

「ある人？」

相模は興味があるのか、追及の問い合わせ口にした。簡単にプライバシーに入りしない相模には珍しいことだつた。気軽に訊けるなら、転校初日に訊いているはすだつた。それをしないのは、短期間しかいない泉への気遣いで、興味本位の質問で傷つけたくないという思いからだつた。

泉は気にした様子もなく、微笑んで答えた。

「絶対的権力者。尊敬してるし、信頼もしてる」

そう言つた泉の表情は優しかつた。好きな人のことを話すような、家族の自慢をするような、穏やかさで。その人に従つことが本当に嬉しいような。

「いつも照れるような顔だつた。

「いいね、そういうの。僕は相模賢。さがみけん よろしく」

相模は泉を気に入ったのか、人好きのする笑みを浮かべ、立ち上がりて手を差し出した。泉は笑顔のまま握手に応じた。

確かに、先程の回答で泉に対する印象は良くなつた。迷いのない答えはそれが真実だと示していて。嘘を言つこともなく、隠すこともない姿勢は誠実で。

欠点がない王子様のように見えた。

「王子様みたいだよな…」

思わず口に出してしまつた。慌てて口を抑えたが、無駄に終わり。

「なるほど。紗雲の呼称は『王子』に決定』

相模の声は教室に響いた。女子から黄色い声が上がる。明日の校内新聞には『王子出現!』とでも書かれるだろう。校内新聞の影響は絶大で、クラスメイト以外の生徒からも『王子』と呼ばれるのは想像に難くなかった。

ちなみに、俺は通称『蒼』で、『一色 僕の好きな色は青 蒼』で命名された。

周りはそう呼ぶが、命名した本人、相模は名字で呼んでいた。理由は不明。全員に別名があるわけではなく、新聞部の眼鏡にかなつた者だけが学校全体の通称を付けられている。

「王子?」

「そう呼ばれることを覚悟しておいた方がいい。ちなみに俺は『蒼』つて呼ばれてる」

「面白いね。他には何があるの?」

「可愛い男子に『姫』、女子陸上部部長に美しい鹿で『美鹿』、不^{みろく}良のボスに厳しい規律の中の武力で『^{げんぶ}厳武』とか」

ほとんどは現新聞部部長が命名したものだつた。どんな力を持つているのか、不良にまで及んでいる。それが通称になつてしまつているのだから、新聞部の力は量り知れない。

「悪意はないんだから。愛称だよ、うん」

相模は握つた手をふんぶん振つた。悪意のない通称は愛称で合つてゐるだろう。

一部の教師でさえ呼んでいる。

不良のボスである高橋も、『厳武』の方がカッコイイと氣に入つ

ていた。

「名は体を表す、だね。愛称が使われるのはいいけど、特別な人は『本当の名前』で呼ばれたいと思うよ」

「そう！ だから僕は一色を蒼とは呼ばないんだよ。一色は一色だから」

意気投合した二人は握手からハイタッチに変えた。

特別だから特別に愛称をつけるんじゃなくて、特別な人は本当の名前で呼びたい。特別な人だから、他の人には本当の名前を呼んでほしくなくて、愛称を作る。

自分が本当の前で呼ぶために。

矛盾しているようだけど、単純な独占欲のかもしけない。

「そういえば、夢の中の彼女は『アユム』って言つてたな」名前談義でふと思い出した。消える直前に名乗った彼女。あの状況では名乗る必要性はなかつたはずだ。

「夢の中の彼女？ 何それ」

今朝、泉に話したように搔い摘んで話した。泉も再現するように、同じコメントを挟んだ。相模は時折相槌をしながら、茶化すことなく最後まで聞いた。普通なら笑つて「夢だろ」と終わつてしまふ話を、相模は否定することなく最後まで聞いて自分の意見を述べる。少し、泉に似ていると思つた。

「世界云々よりも、一色が『忘れていること』が気になるね。それを思い出せば、世界のこともわかるんじゃないの」

「せめてヒントがあればなー」

「あるよ、ヒント」

さらりと、泉は笑つたまま言つた。あまりにも自然だつたため、驚きで動けなかつた。相模も驚いたようだが、それを顔に出さずにマイクを突き出す仕草をした。

「どんなヒントですか？」

「アユム。歩くつて書いて『歩』だと思つよ」

それが一般的な名前だが、泉の自信はどこからくるのか。

相模の追及が続いた。

「その根拠は？」

「今は秘密。新月の日までに思い出せなかつたら教えるよ」

答えを知つてゐるかのように振る舞う泉に、相模は両手を上げて降参した。いずれ分かるなら、今無理に訊く必要はない。

新月の夜まであと二週間。思い出さなければいけない気持ちが増した。

3・本当の名前

「まだ、思い出せないんですね」

後ろを振り向くと、彼女がいた。歩、と口が勝手に動く。歩の表情は悲しみを含んだ微笑だった。

「拒んでいるんですね。本当はまだ、そのときじゃないから。でも、待つてられないんです」

歩は迎えるように右手を伸ばした。悲しみを湛えて何を望むのか。その手を取ってはいけない気がした。首を横に振つて拒絶する。

「センカ…『名前』を思い出してください。『鮮やかに香る』ではないものを」

違う字を持つセンカ。泉の知つている鮮花。その字じやない、と本能が告げる。

「君は『歩く』で『歩』なのか?」

突然の問いに歩は笑みを消したが、すぐに微笑に戻した。問いかに、強く、しつかりと頷いた。

歩。どこかで聞いたことのある名前。泉が知つていた名前。本当の、名前。

鮮やかなのは何なのか。

「大丈夫ですよ。あなたは一人じゃないですから」

励ましか、慰めか。パチン、と頭の中で音がした。歩は前と同じように消えた。

何もわからぬままだったが、歩に会えただけで安心した。泉は何か知つている。どう聞き出そつかと、一人残された空間で考えた。

「歩に会つた」

いつの間にか習慣になつっていた泉との登校。挨拶の後に続けた台詞に、泉は見事に固まつた。

「名前を思い出せって。最近名前の話が多いな
「固有名詞だからね。特定の人物を示すもので
「じゃあ、君の本当の名前って何?」

泉は一瞬顔をしかめたが、すぐに嬉しそうに笑った。

『泉』と呼ぶのに最初から違和感があった。歩は呼び慣れた感覚があつたのに、泉という単語は言い難く、違つ名前で呼びそうになつたことが何度もあつたが、何て呼ばうとしたのかわからなかつた。『泉里だよ。泉に里で泉里。全くの偽名つてわけじゃなかつたんだよ

』

泉里。また頭の中で弾ける音がした。パチンと軽快な音は指を鳴らすような音で、聞き慣れたものだつた。

泉里と指の鳴る音。二つの音が聞き慣れているのは何故。

「泉里、か。なんでこんなに言い慣れてる氣がするんだろ」

「それを思い出すのが早いが、名前を思い出すのが早いが。その答えが全部の答えになるよ」

新月は明日。明日になつても思い出せないなら。何が起ころのかわからないからこそ怖かった。

大丈夫と言つた歩。その言葉に今は縋つていたかった。明日は日食。そして新月。光の当たる時間が短くなる日に、何かが明るみに出るような気がした。

4・本当の自分

「泉里、君が一番辛いのかもしねないな」「みんなに会うためだからいいよ。君を見つけてあげる」

清々しく笑えた気がする。泉里。確かに呼んでいた。夢の中で、夢だと自覚できた。

「名は体を表すだね。僕は泉のよう澄んでいて、みんなの古里であるよう」。君は鮮やかなハナであるよう」と「それが守るべきものだからな」

会話に不自然なところはなかった。理解できている。でも、当然わかっていることのようで、意識できなかつた。わかっているのに、思い出せない。

鮮やかな、ハナ。

昼寝から目が覚め、突然視界に入った嫌味なほど青空に目眩がした。日食は午後二時頃と予想されている。もうすぐ、太陽が月に隠れる。皮肉なものだ。鮮やかさなんて見えなくなる。闇に覆われて、何も見えなくなる。形も、色も。

「色も?」

自分の思考に引っかかつた。鮮やかなのは色だ。光がないと色は見えない。

色がなければ、この世界は。

「泉里、全部わかつた」

今までなかつた気配が背後に現れた。それも今なら驚かない。泉里にはそれができる。

「俺は鮮華。鮮やかな華で鮮華。そうだよな、心の司の長」

「正解。色の司の長」

にっこりと、今は隠れた晴天のようだ。泉里は笑つた。司の長。それが全ての答えだった。

この世界は、神を頂点に世界を統べる者がいる。神と共に世界の存続と崩壊を決定することができる五人の『プログラム関係者』の下、枝分かれした『司』がある。字の「司」とく『司る者』で、それぞれ『火』『水』など自然のものや泉里のように『心』、俺のように『色』なんてものもある。

その『司』のトップである『長』は『世界の関係者』と呼ばれ、輪廻転生を繰り返し、十七歳で覚醒する。三十歳になるまでに死に、また生まれ変わる。だから、本当はまだ覚醒までには猶予があった。その『司の運命』の例外で、泉里と歩だけは前世の記憶を持つている。

「これが神の指令か？」

「そう。二年前から僕は関係者を探しているんだ」

短期の帰国には意味があつた。この時期でないといけない理由。

それが、覚醒を早めないといけない理由。

世界が、動きだしている。

「君が今までに覚醒しなければならなかつた理由。日食と新月で、色が奪われるから」

「…なるほど。司の『長』が必要になるわけだ」

今までそんなことはなかつた。明けない夜はない。全てを照らす光は必ず訪れ、色を表していく。

しかし、突然の異変で世界が暗闇に閉ざされようとしていた。救えるのは全てを照らす『光』とモノを形作る『色』の司で。

まだ、『光』の司の長は目覚めていない。

「なんで『光』を目覚めさせないんだ？」

「今回、光の『長』は『従者』の近くにいるんだよ。長を覚醒させると、従者に影響する可能性があるから」

従者。神に似た容姿の一人。そして、世界を決定する五人の中に入る彼ら。その従者に影響を及ぼすとどうなるかわからない。

「それに、今回は『色』が失われるのが問題だつたから。光は影響しないよ」

つまり、光があつても色が表れない。それは確かに異変で。司の長の力が必要なわけだった。

鮮やかに、色を。世界を表現する術として。

「口食が終わるな。さ、世界に色を」

パンツと手を合わせた。それが能力発動の合図だった。聞き慣れた『指を鳴らす音』は自分ではなく、泉里の癖だった。能力発動に指を鳴らすことは多い。しかし、歩のように『微笑み』などもある。俺の場合は『両手を勢いよく合わせる』。

光が現れ、辺りを照らしていく。それに伴つて、世界が色付いていく。

鮮華の名において、この世界の『色』を護る。

「そういえば、歩はなんで夢に出てきたんだ？」

「彼女も一緒に司の長を探しているんだよ。今回君を見つけたのは歩でね。ファーストコンタクトは歩に譲つたんだ。歩は夢を渡る力があるから、夢では歩が、現実では僕が接触するんだ」

日の光に照らされた泉里の顔は穏やかで、見慣れていた顔だった。泉里のことを。あのときは。

護りたかった。

「辛くないのか？」

「歩がいるからね。歩が一番辛いから。死ねないって、ずっと責任を負わなきやいけないって想像するより辛いだろうね」

泣きそうに顔を歪めた泉里に、思わず抱きついていた。心の司の長。相手を思つあまりに、自分で傷ついていた。それは歩だから。死ねない歩だから。だから、歩のために。

なら、俺は泉里のために傷つこう。

あのとき、前世で泉里が人間に殺されたとき、護れなかつたから。

「歩のパートナーが早く見つかるといいな。泉里のも」

「うーん今回は従者一人がそれぞれ光と闇の長がパートナーみたいだしね。僕もこの人かなーと思う人はいたりするんだけど」

泉里の苦笑の混じつた答えに、抱きつく腕に力が籠もつた。

パートナー。本当の片割れ。魂の片割れともいう。司の長はその責務ゆえに恋愛感情を持たない。輪廻転生を繰り返すから、子孫を残すことができない。

しかし、同性の関係者なら、特別な存在にしても良かつた。同じ責務を負い、子孫を残すこともない。

ちなみに、俺は火の長がパートナーだ。

「君も早く火澄^{ひすみ}に会わないとね。何かが起る前に」

「もう起り始めているね」

後ろにかかつた声に肩を震わせた。泉里は予想できていたのか、クスリと笑った。

泉里を抱きしめたまま、声の方へと向いた。
何故、彼が。

「いつから気付いてた？」

「確信はしていなかつたよ。君は対象じゃなかつたからね」

泉里はそつと腕から抜け出し、相模の方へ体を向けた。両手が支えを失つて落ちる。

それを見ていた相模は、今まで見たことがない表情を浮かべた。
ただの友人ではなく、親愛を込めたそれは。

「火澄…？」

「そうだよ、鮮華。君のパートナー、火の司の長だ」
不敵に笑つた相模こと火澄は指を鳴らした。パチンと軽快な音と共に顔の前に火が浮いた。

火は怖くない。彼の火は優しいから。

「なんで教えてくれなかつたんだよ…」

「まだ覚醒の時じゃないからさ。僕が目覚めたのだつて異常なんだ。
まあ、泉里が来てから覚醒したんだけど」

火澄は火を消し、指を鳴らした手を前へ伸ばした。おいで、とい
うように。待つていた、というように。

足を動かせずにいると、泉里が背中を押した。軽い力で、一步が踏み出せた。

前世で初めて出逢つたパートナー。転生後に会うのは初めてにな
る。運命のように、また彼だけを選ぶ。

「本当は何度も言つたかった。思い出してくれつて。でも、泉里が
いたから。だから、待つていたんだ」

「泉里が来る前から、俺たちは選んでいたんだな」

迷わずに火澄の手を取った。しっかりと、強く握った手は確かに火澄のものだつた。姿形は違つても、感覚が伝える。魂が、片割れを求めている。

「抱きつけばいいのに」

「泉里の前で？ それは嫌」

いーっと歯を見せて笑つた火澄は楽しそうだつた。覚醒したから思い出す仲間意識。泉里と初めて会つたのは司の長になるときで、その儀式に彼はいた。それから転生する度に出会つていた。

泉里は司の長の中でも上位に位置し、神の指示で仲間を探すくらいの信頼がある。だから、泉里が『プログラム関係者』以外で一番辛い立場にいると思う。

「早く君のパートナーが見つかるよ！」

「ありがと」

「あれ？ あいつじゃないの？ 泉里のパートナー」

火澄は不思議そうに泉里を見た。首を傾げ、違うのかな？と呟いている。

あいつ。泉里は心当たりがあるのか、目を見開いていた。

「彼は違うんじゃ…」

「泉里の言つてる『彼』かどうかはわからないけど、長が代わつた司がある。『知識』の司だから、泉里に関係あるかなって」

司の代替わり。それは突然で、きっかけなんてなかつた。ある日突然体に紋章が浮かび上がる。それは痛みを伴う場合もあれば、気付かないこともある。気付かなかつたときは、使徒の迎えにより判明する。

そこから前世の記憶を持つ輪廻転生が始まる。『世界の関係者』として。

「『知識』か。前は女性だつたね。火澄の勘が当たつてているといいな」

泉里の目が優しく細められた。早く。早くパートナーを見つけて出会つて始めてほしい。運命の人に出会うための転生を。司の長

の責務を分け合えるように。

前世でパートナーに出会った俺だから、出会った喜びは誰よりも強く覚えている。

「『あいつ』つていうくらいだから、長に会ったんだろ？ どんな人だったんだ？」

「綺麗な黒髪で、茶色の瞳だった。利発そうな、カッコイイ人だったよ」

火澄の説明に、泉里が寂しそうな顔をしたのが目に入った。それはすぐに笑顔に塗り替えられたが、纏う空氣は隠せていなかつた。

泉里の言う『彼』じゃなかつたんだ。

「彼は一度心臓が止まつたんだつて。それから蘇生したんだけど、そのときに司の長の紋章が出たらしい」

「それつて…」

「違う魂だつてさ。道の司の長が言つてた」

道の司。人生を管理する者。生死を操ることはできないが、選択肢を増やしたり減らしたりしてくれる。一番良い方法を提示してくれる人だった。

その長が言つたのなら、正しいだろ？

「泉里の言う『彼』つてもう亡くなつてているんだよな？」

「…うん。だから『関係者』じゃないって」

覚醒前に死ぬことは、『関係者』であることを否定する。『関係者』の寿命は決まつていて、それまでは死なないようになつていて、どんな事故があろうと、『奇跡的』に助かるようになつていて。

それが起こらなかつたということは、『関係者』ではない。

「不慮の事故で死んで生まれ変わつていうのも『奇跡的』なことじやないか？」

違う魂なら、肉体は違つていても、同一人物に成り得る。輪廻転生するように、同じ時間軸に生まれ変わるのは、新しい長になるためだとしたら。

その『彼』が同一人物である可能性は高い。

「まあ、期待して違うかったらショックだらうし、『知識の長』を覚えておく程度にしておきなよ?」

期待するほどショックは大きい。火澄の忠告を泉里は苦笑で受け止めた。

「とにかく、全ては神が目覚めてからだよ。この世界の異変をどうするか。全部終わつたら、残りの人生で彼を探すよ」
全部終わつたら。神が目覚めたとき、何が起つるのかわからない。ただ、いつもと違う変化が起つていてことだけがわかつっていた。

『ミシシング・リンク』【アナザーストーリー】後日談（前書き）

『ミシシング・リンク』【アナザーストーリー】を先に読んでいただいた方が良いと思います。

おまけ・ミシシング・リンク後日談

「世界は壊れなかつたな」「ま、そんな気はしてたけどね」

泉里の報告に、俺と火澄は苦笑した。泉里の説明を要約すると、『プログラム関係者』は、世界を崩壊させる『プログラム』を実行することを止めた。何百年も前から決めていた、実行することになつていた今世。今世で、『プログラム関係者』たちはパートナーを見つけた。今世で、『創造』の司が現れ、その人は神のパートナーだつた。

「これだけの要素が揃つたら、結果は自然に導かれる。

「パートナー制度の意味がわかるよな」

「…羨ましくなるくらいにはね」

泉里の切ない笑みに、火澄はため息で返した。

泉里はまだパートナーに出会っていない。でも、心当たりはあるようだつた。可能性があるのに、行動していない。

「出会つたんだよね？　生まれ変わつた彼に」

「うん…違う肉体だつたけど、魂は同じだつた。」

「聞いてみたら？　司の長なら、もう覚醒している年齢だし」

「司の長か、つて？　そんなこと聞いたら、ただの変な人じやない」

泉里が迷つているのはこのことだつた。再会できた、大切な友達。もう会えないと思っていたからこそ、もう一度失うことが怖い。

でも、一歩踏み出さないと何も始まらない。彼からの行動を待つには、可能性が予測できない。

「『プログラム関係者』さえパートナーを見つけたんだ。君も今世で会えるよ」

「…そうだね。そうだよね。うん、聞いてみるよ。世界が崩壊すると思ってたんだ。これくらいのこと、勇気出さないとね」

泉里が吹つ切つたように笑つたのに対し、火澄は力強い笑みを返

した。

大丈夫。みんなが幸せになる道はきっとある。世界は再生を始めている。

次に泉里と会つとき、隣にパートナーがいるような予感がした。

おめか・//シシング・リンク後日談（後書き）

『彼』は知識の長、悠里夏田です。泉里と夏田の出逢いについては、『サイロロジー倶楽部』に掲載予定です。

ねむけ・回し学校（前書き）

『ミッシング・リンク【アナザーストーリー】』の後日談でもあります。

覚醒したら、『能力』を使うことができる。『能力』は、一般的に『超能力』と言われるものに似ているかな。でも、万能ではない。『世界の関係者』でも、世界に対しても都合良くできていなかつた。

瞬間移動できるのは、神と鮮華だけ。今世で現れた『創造の司の長』もできるようなので、3人になるか。

（火澄、今どこにいるんだ？）

突然、頭の中に響いた。鮮華の声だ。

『能力』の一つ、テレパシーは、『関係者』が使う連絡手段の一つで。携帯電話もあるけど、テレパシーが手っ取り早い。

（屋上。運動部の選別中だよ）

今度、部活紹介の特集を組むことになつていて、一人3つの部活を担当することになつていて、どの部に取材するかは、早い者勝ちだ。決めたら、部室の掲示板に書くことになつていて。

今、屋上から校庭を眺め、どの部を取材しようか迷つていたところだつた。

（じゃあ、そこに行くから）

（うん、待つてる）

声は途切れた。鮮華の声に、笑みがこぼれた。周りに人がいないから、笑みを隠す必要はない。

輪廻転生して、違う人間として生まれ変わるから、声は毎回変わる。それでも『鮮華』の声は特別だつた。存在が、特別だつた。早く来てくれないかな。期待で、階段と屋上を隔てるドアを見ていた。

「鮮華じゃなくてごめんね？」

控えめに開けられたドアから覗いた顔は。

「夜宵？」

隣のクラスの夜宵は、につこり笑つて頷いた。

お互い覚醒した今だからわかる。彼は僕たちと同じ『世界の関係者』で。その中で上位に位置する『プログラム関係者』で。

神の側近の『従者』だ。

隣のクラス、という壁は厚く、『プログラム事件』から一ヶ月経つけど話したことはなかつた。

「久しぶり。今世でもカツコイイね」

「ありがとう。夜宵は相変わらず神のそつくりさんだね」

夜宵は、ふふっと笑つた。

従者の容姿は、神と同じになる。従者は2人いて、神と同じ容姿が必ず3人いるから、『自分と同じ顔の人がある』という噂がある。

加えて、関係者は必ず美形に生まれる。夜宵は、今世では可愛い部類に入るかな。

「冥里は？」

「風紀委員の会議に出てる。火澄は鮮華と待ち合わせ？」

「うん。もうすぐ来ると思つよ」

夜宵は、僕と鮮華がパートナーだということを知つてているようだつた。初めに「鮮華じゃなくてごめん」と言つてたし。

まあ、僕も夜宵と冥里がパートナーだつて知つてたし。

パートナー同士は、纏う空気が違う。恋人のような甘いものではなく、強い繋がりを感じる。見ている方が幸せを感じるような、綺麗な空気を纏つている。オーラが違う、という感じで。

夜宵は、僕と鮮華が一緒にいるところを見たことがあるわけだ。

「同じ学校の生徒になつた縁で、良いこと教えてあげる」

突然、夜宵は学ランの首のホックを外した。

いきなり何を。何か言おうと思つても、言葉が見つからなかつた。

夜宵は第2ボタンまで外し、中のシャツのボタンも外した。シャツの隙間から覗く肌には。

「これが従者の紋様なんだけどね。関係者が紋様に触れると、光る

んだよ」

ほら、と夜宵はシャツを広げた。

鎖骨に浮かび上がった紋様は、緻密で精巧なデザインだった。さすが従者の紋様だ。

触れると光るといつだから、触れといつとか。
紋様にそつと指を当てた。

「うわ…」

紋様は淡く光った。紋様自体は茶色で、光ると赤っぽく見える。指先から伝わる体温が、一層神秘的に見せた。

「うーわーき?」

近くで聞こえた鮮華の声に、思わず手を引いた。
疚しいことはないのに。夜宵の恰好と僕が触れているのを見て、誤解しない方が変か。

鮮華は瞬間移動で、僕の背後に立っていた。

「なんてな。何やつてたんだ? 夜宵が素敵なお好してるけど」

「内緒話かな」

夜宵は可愛らしく首を傾げた。

うん、嘘じやない。嘘じやないけど、誤解を招く簡潔すぎる答えだ。

夜宵は意地悪じやない分、種明かしはすぐにしてくれた。

「紋様は、関係者が触ると光るんだよっていうルールをね。鮮華も触つてみる?」

夜宵の提案に、鮮華は頷いてすぐに触った。即行動は、鮮華らしい。

さつきと同じように、紋様が光った。
「見たことない色だ」

鮮華らしい感想だ。

さすが色の司の長。鮮華は、暫くその光を見ていた。僕には『見たことない色』といづのはわからないけど、神秘的な光は特別だと思えた。

夜宵と視線を合わせて苦笑した。今日は肌寒い気温だから、夜宵は寒く感じるだろう。指をパチンと鳴らし、屋上的一部に狭い範囲の四角い結界を張つて、その中の四隅に火を起こした。換気もできる、簡易暖房部屋というところだ。

夜宵は笑みを深めた。火を司つてゐるんだから、これくらいはさせてもらわないと。迷惑かけてるのはパートナーだし。

やつと鮮華は満足したのか、手を離してシャツのボタンを止めた。

「ありがと。でね、火澄。君の紋様はどこに出るのかな？」

「右の頬だよ」

紋様は普段見えなくなつてゐる。自分の意志以外で表れるのは、覚醒の瞬間だけだ。頬にタトゥーなんて、変に目立つし。

右頬に手を当て、紋様を出した。

「へー知らなかつた」

そういえば、鮮華には見せたことがなかつた。そもそも、見せる必要がない。紋様を見せる必要がある状況つていうのが考え難い。鮮華の紋様も見たことがない。

夜宵には、長として神に挨拶に行つたときに見られたと思つ。挨拶のときには、紋様を見せるのが礼儀になつてゐる。

「なんか火、つてわかる紋様だな」

鮮華は興味津々といった感じで頬に左手を伸ばした。触れられるのに抵抗はない。既に鮮華には何度も頬を触られたことがある。紋様が出た状態では初めてなだけで。

さつきと同じように、光るだけだと思つてゐた。

「…青？ それに温かい…」

直接見えなかつたけど、視界に入る光が青いことはわかつた。触られた箇所が温かいのもわかる。

鮮華が紋様をなぞるのがくすぐつたかつた。

「パートナーが触れると、青く光るんだよ」

「青…世界の色か」

温かい色なら、暖色系を思い浮かべる。でも、光は青だつた。

青は地球のイメージで、確かにパートナーとの関係を表すのに適当な色かもしない。

鮮華の表情が柔らかいのが、嬉しかった。

「あ、そろそろ行かなきゃ。じゃあ、またね。隣のクラスに遊びに来てね。僕も行くから」

夜宵はパチンと指を鳴らし、結界を消した。人が作った結界を消すなんて、さすが従者。結界が消えて、肌に冷えた空気が触れた。バイバイ、と手を振つて、夜宵は屋上のドアを閉めた。

鮮華は頬から手を放し、右手で左手の甲を撫でた。紋様が浮かんだ。

「…こんなに近くにいたとはな」

パートナーだけじゃなく、従者と闇の司の長が同じ学校にいた。『プログラム関係者』で神、使徒、賢者は全員同じ学校だということだし、やつぱり今世は異常だった。

それでも、世界が続いている。世界は滅ぶのを止めた。それなら、僕は、僕達は司の長として、『世界の関係者』として、世界を護ろう。

そつと鮮華の手を握つた。

「いろんな長に出会いおうね。今世は思いつきり楽しまないと
鮮華の手が青く光つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8927c/>

世界の関係者たち

2011年2月13日21時25分発行